

繁る森の外 out of dense forest

夏池 風牙
Natsuike Kazayu

2014年4月8日[火] — 20日[日]
11:00から19:00

月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで / 最終日18:00まで

Gallery PARC

夏池 風牙 | Natsuike Kazayu

風景、写真、植物といったものは、なじみがありながらも人にはコントロールしきれない現象のようなものとして私には感じられます。それらが時に様々な意味をあてがわれ、印象を持たれ、もしくは見過ごされる、その無数の切り替わりの有様に興味があります。そういうものによる一つの空間を作りたいと思います。

[C.V.]

1984 静岡県生まれ

2009 京都市立芸術大学大学院美術研究科漆工専攻修了

【個展】

2012 点滅する [同時代ギャラリー / 京都]

2011 繁る森の外 3 [collective parasol / 京都]

繁る森の外 2 [collective parasol / 京都]

繁る森の外 [gallery shop collage / 京都]

2010 地ノ味をながめる [collective parasol / 京都]

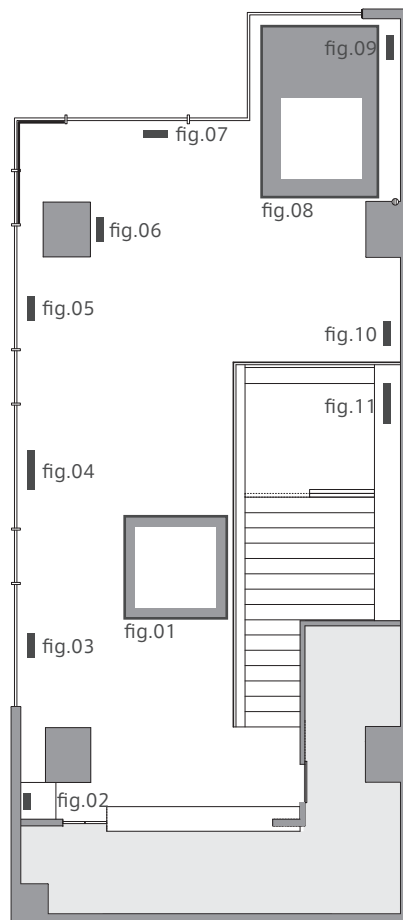
2008 遍在 [海岸通りギャラリーCASO / 大阪]

【グループ展】

2007 P&E2007出展 [アートコートギャラリー / 大阪]

展示作品 | Works

fig.01	木と生垣	2014	木、コンクリート
fig.02	75,76	2011	ダイレクトプリント
fig.03	3	2013	タイプCプリント
fig.04	2	2012	タイプCプリント
fig.05	4,5	2011	ダイレクトプリント
fig.06	2	2013	タイプCプリント
fig.07	23	2013	タイプCプリント
fig.08	木と生垣	2014	木、コンクリート
fig.09	13	2012	タイプCプリント
fig.10	25	2013	タイプCプリント
fig.11	10	2012	タイプCプリント



質疑応答: Questions and Answers

■展覧会について

風景は目の前にある世界そのもの、本来は区切りも意味もなく、ただ存在するように思われるものだと考えます。人がそこにあるものに見出す利用価値や思い入れは、風景のもつ要素のほんの一部に過ぎないし、人同士が同じことを思う訳でもない。それを撮影した写真、また写真に写っているものも同じことだと思います。植物も、他の全ても結局そうなるかと思っています。生物も他律的なもので、人の認識の及ばないサイクルで存在しているので、それらを見るのは現象を眺めるようなものではないかと思っています。

展覧会では一つの体験をつくりたいと考えています。今回の展示は作品によるインスタレーションで完成する作品で、この作品では展示と作品が同義語ですが、しかし、それを「完成する展示」というのとは少し違う気がします。

■展覧会タイトル『繁る森の外』とは？

自分のまわりにある世界(=日常)はよく繁った森のように複雑で興味深いものだけれども、その繁ったものに遮られて見えない森の外もあるだろうということ。展覧会では写真は「繁る森」で、そこから導きだされるかもしれない感覚は「外」だと考えています。

■あなたにとって「作品」とは何を指しますか？

過去に3度同じタイトルでおこなっている『繁る森の外』という展覧会では、おそらく毎回そうなのですが、一つ一つの写真はタイトルがその番号の「作品」であって、植木も「木と生垣」という「作品」で、並べられたそれらと人が出会う「体験」があり、そこで生まれてほしいと考えている個々人の感想(経験や考え方にまつわる共有できそうで全くできないもの)が生まれることも含めて、全体で「繁る森の外」という作品であると考えています。

■これまでの展覧会『繁る森の外』との関わりは？

これまで「木と生垣」の作品をもって、場の雰囲気を変えようという役割も持つシンプルなものにしてきたのですが、作品というには不完全だと思っていて、今回の展示ではそれが叶うのではないかと考えています。

■風景とは？

ただ目の前に広がっているもの。

■写真とは？

カメラのレンズの前にあったものが、カメラの仕組みに乗っ取って写されているもの。その、ただあったものが写り込んでいる、ということが今回の作品で使うにあたっていいなと思っています。

■植物とは？

生物は身近な他者、と思っています。植物は動物に比べて懐いたりしない分さらによくわからない存在で、個人的には理由がわからないまま惹かれています。

■空間とは？

感覚に影響を与えるものだと思います。

■作品をつくることは？

感覚を存在させておく為のもので、考えたり感じたりすることの中間にある、ひとつの方法だと思っています。

■人に見せることについて

作品をまず作ることは私の望みで個人的にしたいことをして、見せるときには作ったときは別の目的で見せられるようなものが良いと考えています。伝えるため、見せるために作ることがしたいとは思ってなくて、作ったものが人と関わって、別の現象が生まれるようなこと、それが人と関わることの面白さや何かの興味とつながるならその形にしようとは今考えます。

私個人がしたい作品が、その人との関わりについてのもので展示されるのは、おそらくコミュニケーションの不可能性とそれに対する興味が軸になるかなと思います。それは日常におけるもう一つの視野の外なのではないかと考えています。

日常生活において、周囲に人が存在するのは当たり前で、その当たり前な状況の中で、その有様にリアルな関係を作品が持っていたら良いなと思います。

展覧会について | About

本展は今年で2回目の開催となる国際写真フェスティバル「KYOTOGRAPHIE」のサテライト展である「KG+(ケージープラス)」への参加展覧会です。

また、Gallery PARCではこの開催期間にあわせ、「夏池風牙展」(4/8~4/20)、「大洲大作展」(4/22~5/4)、「麥生田兵吾展」(5/6~5/18)の3つの写真展を連続開催いたします。本展はその第一弾となる展覧会です。

2009年に京都市立芸術大学大学院美術研究科漆工専攻修了した夏池風牙(なついかぜかぎゆ/1984年、静岡県生まれ)は、これまで写真を用いた展示を重ねてきましたが、その作品はフレーム内におさめられた被写体を提示するものではなく、「写真」を媒介として「自分が見ているものと見えていないものとの関係性」あるいは「視野の外にある世界にアプローチする」ことに主眼が置かれ、写真を含む「空間」を作品として提示するものです。

本展会場内にはフィールドワークに基づいて撮影された9点の風景写真とともに、生垣と植物が持ち込まれ、そこにひとつの空間を仮設しています。

一見してありふれた風景が写し取られた個々の写真には、かろうじて「植物のある都市空間」、「映り込む数字(番号)」といった共通性が見て取れる以外に共通項は無いように感じられ、また「中身の反転したふたつの生垣」、「白く塗られた壁面」といった要素もその関わりあいは明確なものではありません。

つまるところ「ここ(写真の内にも外にも)には何も無い」のかもしれない空間を前に、しかし鑑賞者はそこに何かを「見て」、そこから何かを「思い・考え」、そこに何かを「表現」されていると思う瞬間を体験することがあるかもしれません。夏池のしつらえた空間には、例えば鑑賞者の目があるポイントに焦点を結び、その外側(空間)へと思考・記憶が延びた果てに、そこに異なる意味(のようなもの)を見出させます。また、見出された意味は、目の前の空間との関わりあいを求めるかのようにその認識を変化させ、鑑賞者の目はまた違った光景をそこにみつけることとなるのではないのでしょうか。

夏池の作品は、「見ること」に端を発し、それらが紐づけられた経験や記憶によって「イメージ⇔意味⇔イメージ」へと転換していく体験を提示するもので、鑑賞者にその反復を呼び起こす装置のようなものかもしれません。そして、その体験をもって鑑賞者に「視野の外にある世界」の有り様を顕在化させるものといえます。

世界は「見ているもの」と「見えていないもの」で出来ています。本展では「見ているもの」の外側にある広大な「見えていないもの」の気配を感じるとともに、その2つの間にある多様な関わりを感じ取る機会となるのではないのでしょうか。